

# カワセミは飛んでいるのか？

## 川端茅舎句「翡翠の影こんこんと溯り」の語用論的分析

高 本 條 治\*

(平成6年10月31日受理)

### 要 旨

副題に示した川端茅舎の俳句について、(a)「カワセミは飛翔している」、(b)「カワセミは静止している」という2つの解釈が行われている。また、(a)と(b)を併用する解釈も見られる。本稿では、Sperber & Wilson (1986a) の関連性理論の枠組みで、この句の解釈になぜ不確定性が生じるのかを、次の点から語用論的に分析し、考察を加える。

- (1) この句についての従来の句評には、どのような解釈上の問題点が内包されているか。
- (2) 「こんこんと」という副詞によって、どのような曖昧性がもたらされているのか。
- (3) 「翡翠」への指示対象付与の問題と、この句の解釈とはどのようにに関連しているのか。
- (4) 一見相反するように見える2つの解釈が多重に併存できる理由は何か。

### KEY WORDS

pragmatic analysis

語用論的分析

relevance theory

関連性理論

ambiguity

曖昧性

ambivalence

多義併存

amphibology

多重解釈表現

nonce-word

臨時一語

descriptive use

描写的用法

interpretive use

解釈的用法

### 1. はじめに

人間の認知に関する一般理論として提唱されている関連性理論<sup>1)</sup>は、言語伝達におけるメタファーやアイロニーの使用にも言及しており<sup>2)</sup>、従来、修辞学や文体論の分野で論じられてきたテーマの多くをも説明対象としている。本稿では、関連性理論の枠組みを利用し、川端茅舎<sup>3)</sup>の一つの俳句作品を直接の分析資料として、語用論的な観点から、その解釈の可能性と優先度に関する分析を行う。その際、この句についての文学的研究や文芸的批評の成果も重要な資料として利用するが、本稿自らは文学的研究ないしは文芸的批評を目指すものではない。本稿の主たる関心事は、俳句の評釈や鑑賞という営みの中では、日常の発話解釈とはやや異なった処理のしかたが容認されているという語用論的事実を指摘し、その理由を考察する点にある。

\* 言語系教育講座

## 2. 「翡翠」の句を取り巻く解釈事情

俳句雑誌ホトトギスの昭和8年(1933年)8月号「雑詠」に、川端茅舎の句が4句入選している。その中に次の俳句が含まれている。本稿が分析資料とする句である。

### (1) 翡翠の影こんこんと溯り<sup>4)</sup>

「雑詠」は、主宰発行人高濱虚子が選抜した投稿句を掲載するページである。したがって、茅舎のこの句がホトトギス誌上に掲載されるには、師である高濱虚子の選を経なくてはならなかった<sup>5)</sup>。選抜されることを目指して投句する以上、茅舎は、この句の最初の解釈者として虚子を念頭に置いていたはずである。その際、次のような解釈事情を考慮したことが推察される。

(2)a. 虚子の選句に入るためには、ある基準以上の文脈効果をもつ句でなくてはならない。

b. 虚子は、俳句の解釈者として、ある基準以上の処理労力を容易に発揮できる。

「文脈効果」「処理労力」は、いずれも「関連性」という概念を相対的に特徴づけるのに用いられる用語である。S&W (1986a: 145, 訳書: 175) は、情報を処理する個人にとっての関連性を、次のような2つの程度条件として定義している。

(3)a. 程度条件1: 想定は、それが最適に処理されたときに達成される文脈効果が大きいほど個人にとって関連性がある。

b. 程度条件2: 想定は、それを最適に処理するのに必要な労力が小さいほど個人にとって関連性がある。

例えば、「翡翠の影こんこんと溯り」という俳句を解釈した時、読み手は何らかの心的表示(mental representation)の束、すなわち、想定(assumption)の集合を得る。もし、この俳句から得られた想定が、読み手にとって呼び出し可能な既存の想定(すなわち文脈<sup>6)</sup>)との間に、何らかの結びつきをもつならば、この俳句はその読み手にとって文脈効果をもったことになる。結びつき方によって、既存の想定**の強さ(確信度)**に影響を与えたり、また既存の想定を消去したりするような場合もある(S&W 1986a: 121)。

したがって、この俳句を読むことによって得られた新しい想定が、文脈と強く結びつくことで、全く新しい含意(文脈含意)を生み出すならば、その強い文脈効果ゆえに、読み手にとってこの俳句は強い関連性をもつことになる。しかし、仮にその文脈効果を得るのに、きわめて多大な労力の消費が必要であり、読み手の処理能力の限界を上回るのであれば、たとえ潜在的な文脈効果が見込まれたとしても、この俳句はその読み手にとって関連性の小さなものになる。

「翡翠」の句を投句するとき、茅舎には、この句が「ある基準以上の文脈効果」をもっている<sup>7)</sup>という見込みと、「ある基準以上の処理労力」を発揮できる虚子ならば、この句の文脈効果を正当に引き出してくれるだろうという見込みがあったはずである。だとするならば、この俳句に見込まれた「最適な関連性の見込み」(S&W 1986a: 164)、すなわち、妥当な文脈効果とそれを達成するのに必要な処理労力との最適バランスについての見込みは、特に処理労力の側面において、ある程度、高く見積もられている可能性がある。

処理労力という点で言えば、定型の俳句表現には、次のような事情がからんでくる。

(4)a. 「五・七・五」という韻律によって、明示的に表現できる言語量が制限されている。

b. その一方で、読み手が大きな文脈効果を達成できるように企図されなくてはならない。

俳句表現は、必然的に、非明示的な情報に基づく想定を読み手に要請することになる。問題

は、非明示的な情報に基づく想定と、明示的な言語表現に基づく想定とが、どのように相関するかという点である。これは第4節以降の中心的課題である。次節では、この課題に取り組む際の重要な観点を与えてくれる、いくつかの句評を紹介したい。

### 3. 「翡翠」の句に対する句評

「翡翠」の句が掲載された翌月、ホトトギスの昭和8年9月号誌上の「雑詠句評会」で、田中王城がこの句を採り上げ、次のような句評を行った。便宜上分割して見出し英字を付けた。

- (5) a. 平仮名で「こんこん」と表現した語は、懇に説くさま、暫くつづくさま、明かならざるさま、水の盛に流るゝさま、湧き出づるさま、又は尽きざるさま等いろいろあるが、此場合は尽きざる有様を想はせられる。
- b. 翡翠が飛んで居るのでは無くて杭の上などに止つて水に自分の姿を落し乍ら静かに魚を狙つて居る、水は静かに流れて居て翡翠の影のみを眺めて居ると、何時迄も溯り行く如く感じたのであらう。
- c. 「影こんこんと」の中七字から受ける感じは物静かな感じで、下五の「溯り」で静中の動を思はせられるやうな気持がする。

このうち、aは副詞「こんこんと」の語彙的な曖昧性 (ambiguity) と、その除去に関する指摘である。bは、句意の解説だが、下線部のように、王城はこの句をメタファーとして解釈している。cはこの句の一つの含意として「静中の動」という点を指摘している<sup>8)</sup>。

この王城の句評の後に、高濱虚子の次のような句評が続く。

- (6) 翡翠の影が色こくあざやかに映つてゐる。「こんこんと」と云つたのは、水がこんこんと流れて居る、其水の流れは見ないで、影がこんこんと溯って居ると観じたのである。

下線部の通り、虚子もこの句をメタファーとして解釈している。虚子は明示的には表現していないが、この句に描かれた情景の中でカワセミは静止しており、動いているのが実際には水の流れの方であるという解釈を採っていることは明らかである。王城と虚子の句解は一致する。

昭和9年(1934年)12月号のホトトギス「雑詠句評会」では、中村草田男が次のような指摘を行っている。

- (7) 茅舎の句ではよく音<sup>オン</sup>が其儘同時に姿を現し、姿が其儘音<sup>オン</sup>を現して居ることが有る。(中略)  
「翡翠の影こんこんと溯り」の句では「こんこん」と云ふ音<sup>オン</sup>が水の流れのリズムを現すと同時に、翡翠の姿の鮮さを現して居るが如き類である。

下線部で草田男は、「こんこんと」に多義併存 (ambivalence) を認めている。つまり、「こんこんと」が表す情態として、「水の流れのリズム」と「翡翠の姿の鮮さ」の両方を共存させた解釈をとっている。この草田男の句評に続けて、高濱虚子は「茅舎君の句の性質は草田男君の言つたやうな処が慥かに有る」と賛同を表明している。

以上の、王城・虚子・草田男の句評を集成したのが、次の大野林火(1947:19)の句評である。便宜的に分割し、見出し英字を付した。王城(a~c)・草田男(d)の句評と対応している。

- (8) a. 「こんこん」には水の盛んに流るるさま、湧きいづるさま、尽きはてざるさま等の意があるが、その中、この句の「こんこん」は水の尽きはてず流るるさまの意である。
- b. おそらく谷川であらう。翡翠は飛んでゐるのではなく、杭の上などに止つてその影を

色濃くあざやかに水の上に映して、魚を狙つてゐるのである。水はこんこんと尽きず流れてゐるため、翡翠の影は動かぬのだが、その影のみを眺めてゐると、あたかも影がこんこんと溯つてゐるやうに感じられたのである。

- c. 「影」は静であり「溯り」は動である。一読われわれも清冽な水の上を溯つてゐるやうな感じをこの句から受ける。(中略)
- d. 茅舎の句に於てその「音」は同時にそのものの「姿」を現し、また「姿」がそのまま「音」となつてゐるといふことが考へられる。この「こんこん」について云へば、「こんこん」といふ「音」は水の流れのリズムを現すとともに、水に映じた翡翠の「姿」をあざやかに現してゐる。

この解釈は、若干の字句の改変を伴つて、大野林火(1967)に引き継がれる。この林火の解釈については、後に、大岡信(1989:78)が「このカワセミは飛んでいるのではないという鑑賞(大野林火)に感心したことがある」、西郷竹彦(1991:32)が「大野林火の見事な解釈がある」と述べて高く評価している。しかし、この林火の解釈は、すでに早い時期に虚子のお墨付きを得たものであり、当時のホトトギス同人の多くが共有しえたはずの解釈である。

(8-d)のように「こんこん」の多義併存を認めるか否かに関わらず、茅舎の「翡翠」の句について、カワセミは飛んでいるのではなく静止しているという解釈を採用のものを、以下、Aタイプの解釈と呼ぶことにする。私の目にとまったものを次に列挙する。

- (9)a. 翡翠は飛んでいるのではなく、杭の上などに止まって、その影を色美しくあざやかに水面に映して、魚を狙っているのである。水がこんこんと流れるので、翡翠の影は動かないのだが、その影だけを見ていると、あたかもそれが流れを溯っているように見えるのである。(阿部喜三男 1971:457)
- b. 川面を見つめているといつの間にか自分が流れを溯つてゆくような錯覚に陥る。川辺の翡翠の影も水面にあつて溯るようだというもの。(松井利彦 1974:384)
- c. 水中からわずかに出た杭に翡翠が止まって、じつと獲物をうかがっている。その赤や緑のまじった玉虫色の鳥の落とす影が、流れに映つた影は動かないが、水がこんこんと流れていくため、逆に影の方が流れをさかのぼっていくように感じられたのである。(小室善弘 1976:28)

下線で示したように、Aタイプの句評には、この句をメタファーとして解釈することを明示的に解説するための表現(「～ように」「～ようだ」)が伴っているのが特徴である。

「翡翠」の句をメタファーとして読むAタイプの解釈に対して、カワセミが飛翔する姿の描写であると読む解釈がある。以下、これをBタイプの解釈とする。飯田龍太(1970, 1982)は、一貫してBタイプの解釈を採用している。

- (10)a. 敏捷な鳥影を、いわばスローモーションカメラでとらえたような句だ。表現の魔術とも言うべき精妙の把握、写実に徹してそれを超えた神品といえる。(1970:221)
- b. カワセミの飛翔はきわめて素早い。ことにその鮮やかな彩羽の故に、文字通り矢のようなはやさで水面すれすれにかすめて去るものである。(中略)この句は、高速の飛翔を、スロー・モーションカメラでとらえたような作品である。(1982:276)

石原八束(1979:144)もBタイプの解釈を採用する。

- (11) かわせみは美しい鳥である。その美しい青い影を水面の上に落としながら、その水流をさかのぼつてゆく姿を写した句である。こんこんというオノマトペは、この水流のこん

こんと湧きあがりながら流れるさまを言うたものであろう。

しかし、「翡翠」の句には、第三の解釈タイプがある。A・B両タイプの解釈の併存を認め、この句を多重解釈表現(amphibology)と見る立場である。これを以下、Cタイプの解釈とする<sup>9)</sup>。

たとえば、野見山朱鳥(1969:56-7)では、次のように、まずBタイプの解釈を述べ、続けて、Aタイプの解釈を述べている。

- (12) かわせみが清流の上を真一文字に水面すれすれに飛翔してゆく、その影が鮮やかに水に映るようである、鳥はそのように飛翔しながら水面を打って魚を捕えては飛びつづける。  
(中略) 然し、もう一つの解が成立するようである。それは、木の枝か、杭に止っているかわせみの影が水面にあって、清流がかなりの早さであるために、静止している影が流れをさかのぼるように見えるところを、かなり技巧的によんだとする場合である。

朱鳥はさらに次のように続ける。

- (13) いづれに解するかはにわかには断定し難いが、句をそのままに受取れば第一の解となり、影を生かして技巧的に見れば第二の解である。いづれをとるかとするれば今は第二の解としておこう。

ここでは(やや不明確ながらも)、二つの解釈のうち、Aタイプの解釈の方に解釈の優先度、すなわち解釈バイアスを認めようとしている。

大岡信(1989:78)は、(8)に引用した大野林火の解釈(すなわち、カワセミは飛んでいないという解釈)を「感心した」と評価した上で、次のように述べている。ここでは、解釈バイアスは必ずしも明らかではない。また、明確に「飛んでいる」と言いきっているわけでもない。

- (14) なるほどそうだろう。しかもなお、この鳥はどこまでも飛んでいるように感じさせる。  
「こんこん」という響きのよい、多義的な副詞がきいているからである。

この大岡の解釈に触発されて、「翡翠」の句を用いた授業を中学1年生に対して行った記録がある。授業者は、「このカワセミは飛んでいるの？ 飛んでいないの？ さて、どちらでしょう」と発問する。生徒からは、最初Bタイプの解釈が出され、次にAタイプの解釈が出される。授業者の対応のしかたによる影響もあって、やがてAタイプの解釈の方が優勢となるが、収束段階に入った授業を振り返って、授業者は次のような所見を述べている。

- (15) もう正確にはどっち(飛んでいる、止まっている)だって問題ではないという雰囲気でした。(伊藤信夫1989:48)

また、西郷竹彦(1991:31-3)は、(11)に引用した石原八束の解釈(すなわち、カワセミは飛んでいるという解釈)を「大方のとらえ方」として紹介した上で、続けて、

- (16) この句の声喩〈こんこん〉の本質をふまえての大野林火の見事な解釈がある。

と述べ、大野林火(1967)の解釈(すなわち、カワセミは飛んでいないという解釈)を引用する。したがって、西郷の場合には、大野の解釈の方に解釈バイアスが傾斜しているようである。

なお、ここで西郷が「〈こんこん〉の本質」と言っているのは、次のような内容である。

- (17) 〈こんこん〉というオノマトペ(声喩)は〈水流の躍動するさま〉であると同時にこの句の表現通り〈翡翠の影〉が〈こんこんと湧り〉ととらえなければならぬ。いわば〈こんこん〉という声喩は〈翡翠の影〉と〈水流〉の両者にかかる役割をしているのである。

(西郷1991:31)

西郷は、俳句におけるオノマトペが「かけことば的な役割」を果たすと主張する。この一般化には大いに疑義を感じるが、今はそれに触れない。また、この句の「こんこんと」がオノマ

トペであると言い切れるのかどうかについても問題である<sup>10)</sup>。

ただ注意したいのは、Cタイプの解釈が、「こんこんと」に多義併存性を認める立場と無関係ではないらしいという点である。(14)で大岡信も「こんこんと」を「多義的な副詞」と称していた。「こんこんと」という副詞は、この句にどのような曖昧性を導入しているのだろうか。

#### 4. 「こんこんと」が導入する曖昧性

「こんこん」に漢字表記をあてるとすると、「昏昏・惛惛」(暗いさま)、「滾滾・渾渾・混混」(流されて尽きないさま)、「懇懇・惓惓」(心をこめた様子)などが候補にあがる。また、漢字はあてられないが、他に「咳をする時の声／キツネの鳴く声／堅いものが打ち当たってたてる音／雨や雪、あられなどの降るさま」を表すオノマトペとしても用いられる<sup>11)</sup>。

川端茅舎は、「翡翠」の句で、「こんこんと」という平仮名表記を採っている。この方が、「昏昏と」「滾々と」という漢字表記に比べて、語義の選択可能性が明らかに大きい。つまり、この表記のあり方が、多義性 (polysemy)、すなわち、語彙的な曖昧性を導入する。

仮にこの曖昧性を除去しないまま解釈を行う場合、その解釈は「こんこんと」の多義併存を認めることになる。次の句評(野見山朱鳥 1969: 56-7)がその例である。

- (18) 「こんこん」は漢字で当ると「昏昏」くらいさま、「袞袞」しばらくつづくさま、「渾渾、袞袞」水の流るるさま、水の湧くさま、「懇懇」ねんごろなるさま。その他があるが、ここでは、くらいさま、しばらくつづくさま、水の流るるさま、のいづれにも受取れよう。  
(中略) また「こんこん」は雪の降るさま、堅き物を打つ音の意もあって、かわせみが水面を打って飛ぶさまを内示しているのかも知れない。

ここまで選択範囲を拡大しないまでも、すでに引用した中村草田男(1934)、大野林火(1947)、大岡信(1989)、西郷竹彦(1991)は、「こんこんと」に何らかの多義併存を認めていた。

しかし、「こんこんと」によって導入される曖昧性は、語彙的曖昧性だけではない。構文解析上、「こんこんと」は「溯り」という述語動詞<sup>12)</sup>を連用修飾していると見ることができる。しかし、「こんこんと溯る」という言い方は、日常的な日本語の表現として、いささか奇異である。語と語との慣習的な結合関係に逸脱があるという意味で、逸脱表現 (deviation) と言うことができるだろう。「ぐっすりと歩く」などの例と同様、いわゆる共起制限違反の例である。

よく見かける慣習的な表現、例えば、「こんこんと流れる」「こんこんと諭す」「こんこんと降る」のような表現であれば、「こんこんと」単独では問題となりうる語彙的曖昧性が、述語との意味対応によって解消することがわかる。つまり、「流れる・諭す・降る」の意味によって、先行位置に置かれた「こんこんと」の語彙的曖昧性が(もちろん完全にではないが)遡及的に除去されるわけである。また同時に、そうして局限された「こんこんと」の語義によって、後続位置に置かれた述語動詞の意味も同時に限定されることになる。

「こんこんと溯る」の場合には、「溯る」という述語の意味によって、「こんこんと」の語彙的曖昧性が除去されない。つまり、両者が意味的に局限しあう関係にない。そのため、「こんこんと溯る」という表現が表す概念が十分に特定できず、意味的に曖昧<sup>13)</sup>となる。

しかし、その一方で、多くの句評は「こんこんと」の語義を局限して捉えていた。例えば、(6)で虚子は「『こんこんと』と云つたのは、水がこんこんと流れて居る」と述べ、(7)で草田男は

『こんこん』と云ふ音が、水の流れを現すと同時に(…)」と述べていた。また、(8)の大野林火も、最初の段階では、『こんこん』は水の尽きはせず流るさまの意である」と解釈していた。このように、「こんこんと」は水の流れのようすであるという解釈を受けやすいようである。これはなぜであろうか。

「溯る」という述語動詞が表す動作・作用概念は、その背景に何らかの流れがあることを前提としている。その流れを「溯る」わけである。そのため、「こんこんと溯り」という結合関係の中で、「こんこんと」が潜在的にもつ多義性のうちから、やはり流れがあることを前提とするものが選択されやすくなるのだと考えられる。

しかし、ここに問題が生じる。「こんこん(滾々)と」は流れそのものの状態を表す副詞表現であるが、一方、「溯る」はその流れに逆行する動作・作用を表す。ここに流れの方向性に関する矛盾が生じてしまう。その結果、どちらも何らかの流れを前提とするという点では親和しやすいとはいえ、「滾々と」と「溯る」との結合は、やはり意味的に不整合なのである。

この意味的な不整合に目をつぶれば、前述の通り、統語的に見て「こんこんと」は「溯る」を連用修飾していると構文解析するのが一般的であろう。意味的には逸脱しているが、統語的には適格である。統語構造は、次のように分析できる。

(19) [S [NP 翡翠の影] [VP [ADV こんこんと] [V 溯り]]]

このとき、「翡翠の影」が主格名詞句となる(「翡翠の影が溯る」)ことは問題がないが、「こんこんと溯り」という動詞句が内部に意味的な不整合をもっているため、この統語構造は読み手にとって十分に確信の持てるものとはなりえない。そこで、一種のガーデンパス効果<sup>14)</sup>が生じ、構文解析のやり直しが試される事態が起こりうる。

しかし、この俳句に対して、(19)以外の統語構造を付与することは可能だろうか。私はその可能性は否定できないと考える。このとき、「五・七・五」という定型の韻律パターン<sup>15)</sup>の役割を無視するわけにいかない。この韻律パターンに従うとき、この俳句は、

(20) 翡翠の／影こんこんと／溯り

という3つの韻律単位に分割される。この単位をそのまま構成要素とした、次のような統語構造を検討してみよう。

(21) [S [NP 翡翠の] [VP [ADV 影こんこんと] [V 溯り]]]

「翡翠の」は、後統動詞句に対する主格名詞句として働く。すなわち、「の」を主格の標識であると解析するわけである。しかし、同時に、情報構造の観点からは、「翡翠の」を主題提示表現と見ることが可能である。そのとき、もちろん意味的には等価ではないが、情報構造上は、次のように「の」を「は」や「や」に置き換えた形式と共通することになる。

(22) a. 翡翠は影こんこんと溯り

b. 翡翠や影こんこんと溯り

(21)の問題は「影こんこんと」を統語上の構成要素としている点であろう。この場合、「影」「こんこん」「と」という3つの形態素が結合した「影こんこんと」という形式を、「臨時一語」<sup>15)</sup>と見なしている。臨時一語を「複数の単語連続を臨時的に一語化した」ものと定義する石井正彦

(1993: 4) は、

(23) 臨時一語では、臨時的に結びついた単語連続が、その結合部に助詞・助動詞を介入させず、全体として一つの語の形式をとることを原則とする

と述べている。「影こんこんと」内の結合部には助詞・助動詞は介入していない。全体として一つの語の形式をなすかどうかの保証は難しいが、次の下線部のような副詞との間に、語構成上の類同性があることは疑えない。一つの語の形式をとっていると見なしうるのではないか。

(24) 虎視眈々と見守る。 意気揚々と出かける。 威風堂々と行進する。  
鼻高々に自慢する。 命辛々に逃げ出す。

したがって、「影こんこんと」を臨時一語と見なすことは、あながち根拠の薄いものとは言えず、ならば、(21)の統語構造も一つの選択可能性を有すると認めてよいように思われる。つまり、「翡翠」の句は、統語的に見ても曖昧だということである。

なお、「影こんこんと」を臨時一語と見る場合、この語にメタファー的な解釈が持ち込まれる可能性がある点に注意しなくてはならない。例えば、(24)の例の中には、次のようにパラフレーズが可能なのが含まれている。

(25) 「虎視眈々と見守る」……「虎視ガ眈々とシテイルヨウニ見守る」  
「鼻高々に自慢する」……「鼻ガ高々にナッテイルヨウニ自慢する」  
これらと平行的な解釈が「影こんこんと」にも行われるならば、  
「影こんこんと 溯る」……「影ガこんこんとシテイルヨウニ 溯る」

というメタファー的な解釈が可能となる。

この句に、メタファーとしての解釈を持ち込むことは、Aタイプの解釈の特徴であった。すると、「影こんこんと」を臨時一語と見ることは、Aタイプの解釈に直結するのであろうか。しかし、問題はそう単純ではない。前述の通り、「影こんこんと」を臨時一語と見て(21)の統語構造を付与した場合、「翡翠」は「溯る」の主格であると解析される。だとすると、Aタイプの解釈をとるためには、「影こんこんと 溯る」という動詞句をメタファーだと解釈するだけでは不十分で、「翡翠が溯る」という事態が実際には起きていないというメタファー解釈が必要となる。

この節では、「こんこんと」が引き金となって直接的・間接的に導入される曖昧性を検討してきた。しかし、「翡翠」の句を解釈する上での根本的な問題は、実は「こんこんと」がこの句に導入する曖昧性だけでは説明できないのである。

## 5. 「翡翠」の句の解釈不確定性

伊藤信夫(1989)では、中学生の生徒に「このカワセミは飛んでいるの？ 飛んでいないの？」と発問した。確かに、このような問い方は、川端茅舎の「翡翠」の句がもつ解釈上の問題点の一端をよく捉えている。しかし、この間の背後には、より根本的な2つの問が存在するはずである。一つは、なぜそのような問が発生するのか、という問である。もう一つは、飛んでいるか否かを本当に排他的に決定しなくてはならないのか、という問である。この節では、前者について検討し、後者については次節で検討する。

前節で、「翡翠の影こんこんと 溯る」という俳句が幾重もの曖昧性を潜在させていることを見た。つまり、読み手がこの句の明示的な言語表現をコード解読することによって直接的に得る



意味形式<sup>16)</sup>は、いくつかの論理形式に対応する可能性がある。そのうちある論理形式を選び取ったとしても、まだいくつかの点で限定が十分ではなく、また、いくつかの点で肉付けが十分ではない。そこで、読み手は、必要な文脈想定を呼び出しながら、論理形式をより発展させることで、より個別的で具体的な表示である命題形式を導き出さなくてはならない<sup>17)</sup>。

いま、次の(26)のような構造をもつ論理形式が想定されたとしよう<sup>18)</sup>。

- (26) [S [S [NP t] ] [NP l] ] [NP 翡翠<sub>i</sub>の影<sub>j</sub>(=a)(ガ)] [NP [DET [ADV こんこんと(=b)]] [V x] ] ] [N y] (ヲ) [VP [V 溯り] [V z] ] ] w ] ]

t l x y z w は、そのスロット位置に拡張要素の付加が必要であることを、「翡翠<sub>i</sub>」「影<sub>j</sub>」は指示関係の付与、「影(=a)」「こんこんと(=b)」は曖昧性の除去が必要であることをそれぞれ示している。

この論理形式を、さまざまな文脈想定を呼び出しながら発展させることによって、次の2タイプの命題形式を得ることができたとする。

- (27) a. [t: 夏の日の下がり] [l: 静かな溪谷で]  
 <i: 川の中に立つ一本の杭にとまったまま動かない, 一羽の> 翡翠<sub>i</sub>の  
 <j: 水面にできた, 一つの小さな黒い> 影<sub>j</sub> (a: =日を遮ってできた影) (ガ)  
 こんこんと (b: =水の流れを絶やさないで) [x: 流れつづける] [y: 川] (ヲ)  
 溯り [z: ゆく] [w: かのような気がした]
- b. [t: 夏の日の下がり] [l: 静かな溪谷で]  
 <i: 川の水面すれすれに上流に向かって一直線に飛翔する, 一羽の> 翡翠<sub>i</sub>の  
 <j: 水面にできた, 一つの小さな黒い> 影<sub>j</sub> (a: =日を遮ってできた影) (ガ)  
 こんこんと (b: =水の流れを絶やさないで) [x: 流れつづける] [y: 川] (ヲ)  
 溯り [z: ゆく] [w: のが見えた]

(27-a) は A タイプの解釈, (27-b) は B タイプの解釈に相当する。この場合、両者の違いは、「翡翠<sub>i</sub>」について指示関係付与のあり方と、スロット w への拡張要素付加のあり方の2点の違いだけである点にご注意願いたい。言い換えれば、A タイプと B タイプの解釈の差は、この2点の解釈の差に還元できるということである。

そこで、まず、「翡翠<sub>i</sub>」についての指示関係付与の問題を考えてみたい。例えば、この紀要の目次に印刷された「翡翠の影こんこんと溯り」という俳句を目にした読み手にとって、この俳句表現を取り巻く現実の環境や、この俳句表現の周囲に置かれた他の言語表現は、「翡翠」の指示対象を解釈するための文脈としてはあまり役に立たない。つまり、「翡翠」の指示関係付与のために利用できる文脈は、きわめて制限されているということである。

「翡翠」という表現が正しくコード解読されると、これは、鳥の一種である「カワセミ」のことであるという語彙的情報<sup>19)</sup>が得られる。それによって「カワセミ」の概念が想起される。すると、その概念に結びつく外延 (extension, denotation) の東である百科事典的情報が即座に

呼び出され、カワセミに関する想定スキーマが心的に構成される。

ところが、個人が呼び出しうるカワセミに関する百科事典的情報は、人それぞれに異なっている。ある人は、図鑑やテレビなどの媒体を通じてしかカワセミのことを知らないだろうし、また、ある人は、渓谷で何度も本物のカワセミに出会っているかもしれない。実際にカワセミを見た人でも、どんな動きや状態にあるカワセミを思い浮かべるかはまちまちであろう<sup>20)</sup>。

カワセミに関する随筆・エッセイ7編を調べてみた<sup>21)</sup>。そのうち4編には、一直線に飛翔するカワセミの姿が感動をもって描かれており、残り3編には、杭や枝にとまったカワセミや停空飛翔（後述）するカワセミの姿が描かれている。

また、鳥類図鑑4種類<sup>22)</sup>を見ると、いずれにも、(a)一直線に高速飛翔する習性、(b)獲物を狙って枝や杭にじっと静止している習性、(c)空中で羽ばたきながら静止する習性、が記述されている。(c)は‘hovering’と呼ばれ、「停空飛翔」「空中停飛」「空中静止」と訳される。この場合、カワセミは飛びながら、かつ静止している点に注意していただきたい。

ところが、俳句歳時記6種類<sup>23)</sup>を調べてみたところ、すべてが習性(b)を記述していたが、習性(a)を記述していないものが1種あった。習性(c)を記述しているものは一つもなかった。

このように、百科事典的情報には個別差があるため、カワセミに関する想定スキーマも読み手によって必ずしも一致しないのは当然である。まず、このことを認めておかななくてはならない。

次に、この句の「翡翠」に対する指示関係付与について問題にされなくてはならないのは、その指示用法が、総称指示か特称指示か、また、特称指示であれば、指示対象が、定か不定か、個体か集合か、という見極めである。それに応じて、文脈想定として心的に表示されるカワセミの外延に違いが出てくる。次の例文中の4個の「カワセミ」の指示用法を分類してみよう。

- (28) (a)カワセミはブッポウソウ目の鳥である。この川にも、昔は(b)カワセミがたくさんやってきたものだ。最近はめっきり少なくなった。一昨年、一度だけ(c)カワセミを見かけた。その(d)カワセミを私は旧友のように感じた。

明らかに、(a)は総称指示の用法、(b)(c)(d)はいずれも特称指示の用法である。このうち、(b)は不定の集合、(c)は不定の個体、(d)は定の個体を指示対象としていると理解される。

「翡翠の影こんこんと溯り」の「翡翠」は、不定の個体<sup>24)</sup>という特称指示の読みを受けやすい。なぜ集合ではなく個体なのか。これも多くは、カワセミについての百科事典的情報に依存するだろう。つまり、カワセミは群棲・群飛するような鳥ではないという情報である。

さて、個体であるならば、このカワセミは体軀を有し、その体軀は、何らかの物理的環境の中で、何らかの動きや状態の中にあるはずである。このとき、どのような体軀を想定し、どのような物理的環境を想定し、また、どのような動きや状態を想定するか。上述の通り、これらは、一方では読み手が百科事典的情報から構成したカワセミについての想定スキーマに基づく。また、もう一方では、この句の論理形式やそれを発展させた命題形式に基づく。後者の場合、「こんこんと」によって、何らかの水の流れという物理的環境が想定され、「溯り」によって、その流れに逆行する、何らかの動き・状態が想定される。このようにして、カワセミについての想定スキーマと、この句の論理形式から発展した命題形式とが、互いに交渉し重なり始める。

ここで問題になるのが、このカワセミの体軀が飛翔という動きにあるのか、停留という状態にあるのか、という点である。つまり、「このカワセミは飛んでいるの？ 飛んでいないの？」ということである。これは、「このカワセミの影は動いているの？ 止まっているの？」と問う

ても同じことである。カワセミが動けば、当然、その影<sup>25)</sup>も動く。カワセミが止まっていれば、その影も静止している。

しかし、この句から得られた論理形式は、第4節で検討した統語的な曖昧性を認めるとしても、「カワセミが何かを溯る」、もしくは、「カワセミの影が何かを溯る」という想定を分析的に含意<sup>26)</sup>している。また、「溯る」という概念は、何らかの動きがあることを分析的に含意している。したがって、この句の論理形式を発展させた命題形式が、もし、読み手の文脈想定と一致しなくてはならないのだとすると、読み手は、カワセミが静止しているという想定スキーマを排除しなくてはならなくなる。つまり、Aタイプの解釈は斥けられなくてはならなくなるということである。

これはおかしい。第3節で見た通り、実際に優勢なのはAタイプの解釈である。どうやら「この句の命題形式と、読み手の文脈想定とが一致しなくてはならない」という仮説は、強すぎるようである。W&S (1988: 135-6) は、次のように述べている。

- (29) 第一に、発話は、常にそれと同一の命題形式をもった思考を表示するわけではない。ゆるい言葉づかい (loose talk) やメタファーにおいては、思考の命題形式と発話の命題形式は、単に互いがある程度類似している (resemble) というだけに過ぎない。第二に、発話によって表示されている思考は、常に何らかの事態の描写 (description) であるとは限らない。アイロニーや疑問発話では、それは一步先に進めた思考の一つの解釈 (interpretation) に過ぎない。

つまり、発話は、話し手が伝えようとしている命題形式を、描写的に表示することもあるし、解釈的に表示することもある、ということである。後者の場合、話し手の思考の命題形式と、発話の命題形式とは、解釈的な類似性をもっているに過ぎない<sup>27)</sup>。

「翡翠」の句を描写的表示であると見れば、「カワセミ (の影) が何かを溯る」という分析的含意を受け容れなくてはならず、「カワセミは動いている」ということになる。これがBタイプの解釈である。この句を解釈的表示であると見れば、「翡翠の影こんこんと溯り」という表現に対してメタファーとしての読みが可能になり、このとき、この句の命題形式と読み手の文脈想定とは何らかの類似性をもっていればよいことになる。つまり、「カワセミは止まっているが、その影を映した水が流れつづけている」という想定 (仮にAとする) が、この句の命題形式 (仮にPとする) との間に、「AはPのようだ」「AはPのように感じられる」という関係が成立すれば、語用論的な解釈として何ら問題がないということである。Aの解釈を採る句評では、常に「ようだ」「ように」に類する表現が用いられていた。これは、「翡翠」の句を解釈的表示として読んでいることを示す標識であったわけである。

## 6. おわりに

川端茅舎の「翡翠の影こんこんと溯り」という句には3つのタイプの解釈があった。Aタイプはこの句を解釈的表示として、Bタイプはこの句を描写的表示として、それぞれ解釈する。Cタイプは、この両者を等価的に併記するか、あるいは一方にバイアスをかけて併記するタイプであった。

S&W (1986a: 170, 訳書: 208) は次のように述べている。

(30) 関連性の原則は、もしその原則に合う解釈があれば、それに合う最初の呼び出し可能な解釈の選択を許し、もしなければ、解釈は全くないことになる。もしそうだとするならば、Cタイプの解釈は、通常の発話理解とはかなり異なった面を見せることになる。では、Cタイプの解釈が採られる理由はどこにあるのだろうか。

まず、関連性の定義に用いられた、文脈効果と処理労力という2つの側面から説明することができる。この句の場合、Aタイプの解釈にしろ、Bタイプの解釈にしろ、どちらの解釈も同程度の文脈効果を達成することができ、それと同時に、どちらの解釈も同程度の処理労力を必要とすると見ることになる。その結果、関連性の大小に差は生じない。このとき、この両方の解釈を想定できた読み手が、その一方だけを残して他方を排除するためには、まさにその比較検討のために、余計な処理労力をかけなくてはならない。したがって、多重解釈のままにしておく方が、逆に関連性が大きくなるのである。

次に、2つの解釈の間の解釈的類似性という観点から説明することができる。

(31)a. じっと静止したカワセミの下を川の水がずっと流れて尽きない。

b. カワセミが川の上流へ向かって水面の上をずっと飛翔していく。

この2つの解釈は、何らかの文脈的含意、例えば、「夏の昼下がりのの静かな溪谷は光と爽やかさにずっと満ちていた」というような推意<sup>29)</sup>を共有していると見られる。つまり、互いに解釈的な類似性をもっており、共有された文脈はかなり多い。この2つの解釈を切り替えて想定するとき、必ずしも「全く異なる2つの文脈の間を切り替えて行きつ戻りつ」(S&W 1986a : 139, 訳書 : 168)しているわけではない。言い換えると、aの表示はbの解釈的表示でありえ、また、bの表示はaの解釈的表示でありうる。したがって、両者を併存させることに問題はないことになる。

最後に、(31)のa単独によっても、b単独によっても導き出すことのできない推意を、aとbとを対照させることによって導き出すことができる点からも、Cタイプの解釈が採られる理由を説明することができる。第3節の(5)で引用した田中王城の句評では、この句に「静中の動を思はせられる」と述べていた。句評の多くが、この句に「静」と「動」のコントラストを読み解いている(大野 1947, 野見山 1969, 阿部 1971, 飯田 1982)。このコントラストは、aとbの2つの想定を共通の文脈の中で処理するとき、きわめて明瞭に導き出すことができる。

## 注

- 1) 関連性理論の全体的な枠組みについては、Sperber & Wilson (1986a, 1987) 参照。言語伝達の問題にしばった枠組みは、Blakemore (1992), Wilson (1994) を参照。以下、Sperber & Wilson を 'S&W', Wilson & Sperber を 'W&S' と略称する。
- 2) S&W (1986a : 4章6-10節, 1986b), Blakemore (1992 : 9章), W&S (1988, 1992) 参照。
- 3) 本名は川端信一。1897年(明治30年)東京生まれ。1941年(昭和16年)死去。
- 4) 「こんこんと」の後半の「こん」には、いわゆる「くの字点」の踊り字が用いられているが、便宜上仮名に開いている(以下同様)。ただし、茅舎の死後に編まれた『定本川端茅舎句集』(養徳社、1946年)では、「こんこんと」という表記になっている。
- 5) この句は、のちに茅舎の第一句集『川端茅舎句集』(玉藻社、1934年)に夏の句として収められた。この句集に収められた句も、全て虚子による選を経たものである。

- 6) 関連性理論では、文脈 (context) は、一般的なこの用語の理解よりも広い意味で使われる。Wilson (1994: 41) によれば、文脈は、発話解釈の際に聞き手によって呼び出される想定集合であり、そこには、話し手との共有情報だけでなく、聞き手側に特有な情報も含まれる。
- 7) この句の文脈効果の強さは、「表現の魔術ともいうべき精妙の把握。写実に徹してそれを超えた神品といえる」(飯田 1970: 221), 「みごとな省略と誇張とにより一幅の名画をなしているような感をあたえる」(阿部 1971: 458), 「紋切型の叙景的表現ではないのが、この句を格別おもしろく成功せしめている」(石原 1979: 144) と評価されている。
- 8) (5-a) の問題は第 4 節, (5-b) の問題は第 5 節, (5-c) の問題は終節でそれぞれ検討する。
- 9) 解釈バイアスのありようによって、C タイプの解釈は、さらに下位タイプに分類できるかもしれない。しかし、バイアスのかけ方は所詮、程度差の問題であるので、下位タイプ相互の区別は明瞭であるとは限らない。
- 10) 「昏々と・滾々と・懇々と」を日本語のオノマトペと見なしうるかという問題である。
- 11) 表記・語義は、すべて『日本国語大辞典 (縮刷版)』(第 4 巻, p.1180) によった。
- 12) 「溯り」はいわゆる連用中止形で文を終えている。つまり、「溯り」に後続する何らかの想定要素を敷衍拡張した解釈が要請されていることになる。それを言語で表現すれば、例えば、「溯り (つづける)」, 「溯り (そして、遠ざかっていった)」, 「溯り (また、溯り、溯り、溯り)」などとなるかもしれない。特に、「溯り (つづける)」, 「溯り (ゆく)」などのアスペクト形式で表現できるような想定要素が敷衍拡張できる場合、「溯り」という活用形式は、擬似アスペクト形式とでも呼ぶべき働きをしていることになる。小室善弘 (1976: 28) は、「連用形で言い放して、その影のつきずさかのぼるありさまを表現したのである」と述べている。
- 13) この場合の曖昧性は 'ambiguity' というよりも 'vagueness' の方である。
- 14) 通常の構文解析が失敗するために、もう一度後戻りして構文解析をやり直さなくてはならないような統語特性をもつ文をガーデンパス文 (garden-path sentence) と言う。例えば、"The old train the young." (Wanner & Maratsos 1978: 128) では、通常、第 1 回目の構文解析では 'The old train' を主格名詞句であると解析しがちであるため、正しい統語構造を得るためには、後戻りして構文解析をやり直さなくてはならない。つまり、ガーデンパス効果が生じたのである。
- 15) 林四郎 (1982: 15) は、「その場限りでの一単語」, 「その時その時の必要によって生れ、すぐに消えて行く単語」を「臨時一語」と呼んだ。宮島達夫 (1983: 8) も、「形態論的な基準と、構文論的なかかりうけの基準とが、むじゅんして、単語にわけるのがむずかしい」場合が少なくないことを多くの実例をあげて指摘している。
- 16) 意味形式・論理形式・命題形式の規定は S&W (1986a) の第 2 章 2 節, および第 4 章 2-3 節を参照。大ざっぱに言うと、意味形式は発話形式のコード解読によって直接得られる心的表示であり、いくつもの論理形式に対応する可能性を有する。論理形式は、想定スキーマを含む心的表示であり、指示関係が決まっていない指示表現や、曖昧な表現、具体値が入っていないスロットなどを含む。論理形式は、指示表現についての指示関係付与 (reference assignment), 曖昧表現についての曖昧性除去 (disambiguation), 肉付けに必要な想定要素の敷衍拡張 (enrichment) を施して初めて、その真偽値ないしは蓋然的真偽値が問題にできるようになる。この段階の心的表示が命題形式である。したがって、命題形式

- は、真偽値意味論や格文法などで使用されてきた「命題」という用語とは対応していない。
- 17) 「翡翠」の句は、文のタイプとしては平叙文であり、また、発話行為のタイプとしては断定発話であると見られる。通常の断定発話では、命題形式そのものが主たる表意であると考えられる (S&W 1986a:194)。しかし、非断定発話 (疑問発話、命令発話など) の場合は、命題態度を表す想定スキーマに命題形式が埋め込まれることによって、さらに論理形式は発展することになる (*ibid*:181)。
  - 18) 論理形式も命題形式も心的表示であるので、それを言語を用いて表現することは便宜的にしかできない。ここでは便宜的に句構造表示を援用している。
  - 19) この段階で「翡翠」は、鉱物・宝石の一種である「ヒスイ」のことであるという誤った概念が想起される可能性もある。なお、概念と語彙的情報、百科事典的情報の連動関係については、S&W (1986a) の第2章4節を参照のこと。
  - 20) 例えば、私の知人は今でも、この句のカワセミは「絶対に飛んでいる」と言って譲らない。北海道育ちの彼はカワセミの姿を特に珍しいとも思わずよく見ていたそうである。また、別の知人は、最初、「この句は何か変だ」と言って頭をひねった。その知人は、ワライカワセミの情報しか持ち合わせなかったのだ。
  - 21) 飛翔するカワセミを描いたもの：鳴田忠『カワセミ 清流に翔ぶ』(平凡社, 1979年), 岩本久則『キューソクの野鳥らぶそでい』(山と溪谷社, 1981年), 奥田夏子〔他〕『野鳥と文学』(大修館書店, 1982年), 林大作『カワセミ』(偕成社, 1987年)。静止したカワセミを描いたもの：大作栄一郎『東京の野鳥』(東京新聞, 1981年), 川野惇『カワセミのすむ川』(岩崎書店, 1984年), 竹下信雄『日本の野鳥』(小学館, 1989年)。
  - 22) 参照した図鑑：高野伸二〔編〕『野鳥』(山と溪谷社, 1978年), 高野伸二『フィールドガイド日本の野鳥』(日本野鳥の会, 1982年) 日本鳥類保護連盟〔監修〕『春の鳥』(小学館, 1984年), D. W. マクドナルド〔編〕『鳥類II』(平凡社, 1986年)。
  - 23) 参照した歳時記：『新改訂版 俳諧歳時記(夏)』(新潮社, 1951年), 『現代俳句歳時記 夏』(番町書房, 1963年), 『図説 俳句大歳時記 夏』(角川書店, 1973年), 『合本 俳句歳時記 新版』(角川書店, 1974年), 『カラー図説 日本大歳時記 夏』(講談社, 1982年), 『ホトトギス新歳時記』(三省堂, 1986年)。最後のものだけに高速飛翔の記事がなかった。
  - 24) もちろん、今は亡き川端茅舎自身には、定の個体ということになるかもしれない。
  - 25) 「影」という名詞も多義性をもっている。この場合、カワセミが日光をさえぎってできる影法師であるとも、水に映し出されたカワセミの姿形であるとも、カワセミそのものの姿であるとも解釈できる。小室善弘 (1976:29) は句評の中でこの点を指摘している。
  - 26) 分析的含意については、S&W (1986a:104), W&S (1988:137-8) 参照。
  - 27) W&S (1988:137) によれば、二つの命題形式が分析的含意・文脈的含意を共有するとき、互いに類似性をもつ。S&W (1986a) の第4章7節以降も参照のこと。
  - 28) 推意 (*implicature*) は、文脈だけでも得られず、また、発話の論理形式を発展させることによって得られない想定で、文脈想定と命題形式との総合的含意として、非論証的な過程を含む推論によって得られる。S&W (1986a) の第4章4節, Blakemore (1992) の第4章, 第7章, W&S (1986), Carston (1988), Récanati (1989) を参照のこと。

## 参 考 文 献

- 阿部喜三男 1971 「川端茅舎」(評解), 麻生磯次〔ほか編〕『俳句大観』, 明治書院。
- 飯田龍太 1970 「川端茅舎」(鑑賞), 『日本の詩歌 30 俳句集』, 中央公論社。
- 飯田龍太 1982 「翡翠 鑑賞」, 『カラー図説 日本大歳時記 夏』, 講談社。
- 石井正彦 1993 「臨時一語と文章の凝縮」, 国語学 173 (1993-6)。
- 石原八束 1979 『川端茅舎』(新訂俳句シリーズ人と作品 12), 桜楓社。
- 伊東信夫 1989 「中学1年 俳句『翡翠』(川端茅舎)の授業」, 『「教育技術の法則化運動」症候群』(〔ひと〕文庫), 太郎次郎社。
- 大岡信 1989 『第七 折々のうた』(岩波新書), 岩波書店。〔初出は, 朝日新聞, 1988年7月17日朝刊第1面〕
- 大野林火 1947 「川端茅舎(中) 続現代の秀句」, 俳句研究 4-2 (1947-2)。
- 大野林火 1967 『現代俳句の鑑賞と批評』, 明治書院。
- 小室善弘 1976 『川端茅舎 鑑賞と批評』, 明治書院。
- 西郷竹彦 1991 『名句の美学 <下>』, 黎明書房。
- 野見山朱鳥 1969 『川端茅舎の俳句』, 菜殻火社。
- 林四郎 1982 「臨時一語の構造」, 国語学 131 (1982-12)。
- 松井利彦 1974 「川端茅舎集」(注釈), 『日本近代文学大系 56 近代俳句集』, 角川書店。
- 宮島達夫 1983 「単語の本質と現象」, 教育国語 74 (1983-9)。
- Blakemore, Diane. 1992. *Understanding Utterances: An introduction to pragmatics*. Blackwell. [武内道子(ほか訳)『ひとは発話をどう理解するか』, ひつじ書房, 1994年]
- Carston, Robyn. 1988. 'Implicature, explicature, and truth-theoretic semantics'. In Kempson (1988). [Davis (1991) に採録]
- Davis, Steven (ed.) 1991. *Pragmatics: A reader*. Oxford University Press.
- Kempson, Ruth M. (ed.) 1988. *Mental Representation: The interface between language and reality*. Cambridge University Press.
- Récanati, François. 1989. 'The pragmatics of what is said'. *Mind and Language* 4. [Davis (1991) に採録]
- Sperber, Dan and Deidre Wilson. 1986a. *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell. [内田聖二(ほか訳)『関連性理論: 伝達と認知』, 研究社出版, 1993年]
- Sperber, Dan and Deidre Wilson. 1986b. 'Loose talk'. *Proceedings of the Aristotelian Society* 86. [Davis (1991) に収録]
- Sperber, Dan and Deidre Wilson. 1987. 'Précis of *Relevance: Communication and Cognition*'. *Behavioral and Brain Science* 10.
- Wanner, Eric and Michael Maratsos. 1978. 'An ATN approach to comprehension'. In M Halle., J. Bresnan and G. A. Miller(eds.) *Linguistic Theory and Psychological Reality*., MIT Press.
- Wilson, Deidre and Dan Sperber. 1986. 'Inference and implicature'. In C. Travis (ed.), *Meaning and Interpretation*., Basil Blackwell. [Davis (1991) に収録]
- Wilson, Deidre and Dan Sperber. 1988. 'Representation and relevance'. In Kempson (1988).

Wilson, Deirdre and Dan Sperber. 1992. 'On verbal irony'. *Lingua* 87 (1/2).

Wilson, Deirdre. 1994. 'Relevance and understanding'. In G. Brown, K. Malmkjær, A. Pollit and J. Williams (eds.), *Language and Understanding.*, Oxford University Press.



## Is the Kingfisher Actually Flying in the Air?

A Pragmatic Analysis of Kawabata Bousha's

Haiku: "Kawasemi no kage konkonto sakanobori".

Joji TAKAMOTO\*

### ABSTRACT

Some critics have pointed out that this haiku has at least two possible readings as follows:

- (a) this kingfisher is flying in the air.
- (b) this kingfisher is settling on a bough or a stake.

But, why does this ambiguity occur? Can we determine which reading is more suitable or sufficient for this haiku?

To answer these questions, using the framework of 'Relevance Theory' (Sperber and Wilson 1986a), I analyze this haiku text and describe following issues from the viewpoint of linguistic pragmatics.

- (1) the interpretive indeterminacy in which the critics have been involved.
- (2) the interpretive ambiguity which the adverb 'konkonto' may bring in.
- (3) the interpretive effects of the reference assignment for the noun 'kawasemi'.
- (4) the interpretive interaction between two inconsistent readings as mentioned above.

---

\* Division of Languages : Department of Japanese Language